



平和と独立を求める民衆の「決意」を伝える
神道ジャーナリズム誌

本号の内容

【主張】日本国はいつから「安倍国」になったのか（木川智）：
1 / 【解説】葦津珍彦と二・二六事件（木川智）：3 / 【連載】アジア放浪
記―歴史を掘り起こし日本を見る―34（仲村之菊）：6 / 花瑛塾一・二月活
動報告：8 / 【連載】葦津珍彦と神道ジャーナリズム「時の流れ」を読み解
く2（鎌倉佐助）：13 / 【連載】記録沖縄戦① 軍民・日米それぞれの視点
から（沖縄戦史研究会「棒兵隊」）：17 / お知らせ・編集後記：24

1部 1000円
（別途送料160円）

新型コロナウイルス、検事長定年延長、自衛隊中東派遣……

日本国はいつから「安倍国」になったのか

神苑の決意 主筆 木川智

【主張】 世界的な問題となっている新型コロナウイルス

イルスは、日本国内でも感染が拡大しており、死者や重篤な罹患者が出ている。お亡くなりになった方々に心より哀悼の意を表するとともに、現在症状が出ている方々にはお見舞い申し上げたい。

政府は先月二十七日、全国の小中高校や特別支援学校について、今月二日から一斉に二週間の休校を要請した。感染が拡大するなか、休校そのものは必要に応じてためらわず行うべき措置ではあるが、あまりにも唐突で、かつ全国一斉の休校という四角四面の措置であり、疫学的にも有効性が疑問視されて

おり、各方面から批判が高まっている。

一斉休校の要請については、安倍政権内部においても軋轢を生んでいるようだ。特に教育行政を担当する萩生田文科大臣は一斉休校に強く反対したようであり、安倍首相側が押しきるかたちで実施したといわれ、与党内からも「首相は勝負に出た」などと言われている。

それではなぜ安倍首相は「勝負に出た」のか。正確にいうならば「勝負に出た」のではなく、「勝負に出ざるを得なかった」のだろう。ではなぜ「勝負に出ざるを得なかったのか」。西日本豪雨や台風災害な

ど過去の自然災害時の対応同様、事態発生当初に状況を甘く見て初動対応を誤り、立ち上がりが遅れ、あらゆる対策が後手にまわったからである。そうした安倍首相の初動の遅れは、感染拡大と国民の不信感を招き、内閣支持率は如実に低下している。こうした政権の危機的状況を打開するために、安倍首相は一斉休校という「勝負に出ざるを得なかった」といえる。

さらに一斉休校の要請は法的根拠も曖昧であり、専門家の知見に基づくものでもないことも明らかとなってきた。そうしたなかで子どもや保護者へ